

あなたの愛など
要りません❶

冬馬亮
Ryo Toma

Regina
BUNKO

クルト

♡♡

アルフの弟で、
ランスロットの従者兼護衛。
勉強よりも剣を振る方が
好きな行動派。

アルフ

♡♡

クルトの兄で、
ランスロットの従者兼護衛。
面倒見のいい性格。

アリー

♡♡

ヘンドリックの愛人。
割り切りが早く、くよくよしない性格。
貧民街で育ったせいか、
生きることへの執着が強い。

ランスロット

♡♡

ラシエルとヘンドリックの子ども。
バームガウラス公爵家の次期当主として、
英才教育を受ける。
誠実で愛情深く、純粋な心の持ち主。

ヘンドリック

♡♡

バームガウラス公爵家の当主で、
王国騎士団長を務める。
後継を儲けるために
ラシエルと結婚するが、
運命の相手である
アリーだけを愛している。

キンバリー

♡♡

バームガウラス公爵家の次男。
幼い頃から騎士に憧れ、
才能では兄のヘンドリックに
劣るものの腐ることなく
鍛錬に励む努力家。

ラシエル

♡♡

シュリンゲン伯爵家の
真面目で一途な令嬢。
長年の片想いの相手、
ヘンドリックと結婚するが、
とある事件をきっかけに、
命を落としてしまう。
しかし、目を覚ますと、
時間が遡っていて――!?

登場人物紹介

CHARACTERS

目次

あなたの愛など要りません 1

書き下ろし番外編
あの日、あの時、
知らず僕たちもまた救われていた

あなたの愛など要りません
1

プロローグ

——ああ、時が巻き戻せるなら。

あの言い伝えが本当なら、どうかこの願いを叶えてほしい。どんなことをしても——

灰色のローブで全身を覆う謎の魔術師は、時を遡る術を持つという。

その存在は各国で民話やお伽噺とぎやなしのような形で語り継がれているが、ほとんどの人は信じていない。

それを信じる人は、ごく僅か。そう、絶望の淵に立たされてもなお、ほんの少しの希望を捨てきれずにいる者たちだけだ。

例えば今、彼の目の前に立つこの人のように——

「……なるほど、それがお前の人生という訳かい」

「……これで、願いごとをしに来た理由に納得したか？」

それまで聞き役に徹していた灰色のローブの男はうつそりと笑うと、左手で空中に何かを描く。

「今度こそ幸せになれ」と言いながら。

すると、突然、何もなかったはずの空間が光を帯び、輝き始める。

ふたりのいる室内が、町が、都市が光で包まれ、そうして時は巻き戻る。

——あの日、あの時の、運命の瞬間へ。

第一章 知らなかった、分かっていた

「誓います」

祭壇の前に立つのは、華やかに着飾った新郎と新婦。色鮮やかなステンドグラス越しにきらきらと光が降り注ぐ中、ふたりは愛を誓う。

今日というこのめでたき日、伯爵令嬢である私——ラシエル・シュリンゲンは、武門の誉れ高きバームガウラス公爵家の当主であり、現王国騎士団長でもあるヘンドリックさまに嫁ぐ。十六という若さで、単独で王子を暗殺者から守りきった過去を持つ彼は、王家の覚えもめでたき高名な騎士だ。

純白の花嫁衣裳を纏う私を見た参列者の誰かが、咲き誇る白薔薇のようだと囁いた。そんな賞賛の声は私を余計に切なくさせる。

……だって、ヘンドリックさまが私に視線を向けることは一生ないと分かっているもの。

今だって、彼はただ不快そうに眉根を寄せて前を見据え、私を見ようともしない。

彼には、心から愛する恋人——アリーさんがいる。彼女は貧民街出身の平民であり、公爵家当主である彼がどれだけ深く愛そうとも、ふたりが公に結ばれることは決して叶わない。彼は高位貴族として、同じ貴族から妻を娶り、後継を儲ける義務があるからだ。アリーさんを妻として囲うことはできても、妻とすることは許されない。そう、それは決して結ばれることのない恋だった。

けれど、ヘンドリックさまは両親による説得に背を向け、今も彼女を手元に置いている。それどころか彼はこう宣言した。

『俺は生涯をかけて、アリーただひとり愛する。政略のために娶る妻に情を移すことはない。俺にとつて妻とは子を産むための道具、その扱いを覚悟で嫁ぐがいい』

歴史ある名家バームガウラスは、公爵位の筆頭に当たる存在、つまり上にあるのは王家のみ。

あんな宣言をしたにもかかわらず、最終的にヘンドリックさまが花嫁を得られたのは、筆頭公爵家としての権力をかざしたからだと言わなければならない。

でも真実は違う、これは最初から全てを承知した上での婚姻なのだ。子を産むただだけの形ばかりの正妻の座、愛さない、情けはかけない、大事に扱うことはない、そのことへの文句も言わせない、それらの事項を盛り込んだ文書への署名を

求められ、私の父——シユリンゲン伯爵は了承した。

その時の父の心境を私を知ることはないけれど、少なくとも私自身は進んでサインをしたのだ。

——ヘンドリックさまに恋をしていたから。

一年前、私はヘンドリックさまに命を救われた。

慰問先の孤児院で犯罪に巻き込まれ、危うく攫われそうになったところを、ヘンドリックさまに助けていただいたのだ。

その時に私が連れていた護衛はひとりだけで、対する相手は七人。

多勢に無勢で護衛はすぐに満身創痍まんしんそういになり、倒されるのも時間の問題だった。私は怖くて声すら出せず、ただ泣きながら物陰で震えていた。

そこに颯爽さつそうと現れたのが、ヘンドリックさまだった。

非番で街に出ていたという彼は、子どもたちの悲鳴を聞き、通報を受けた騎士たちよりも早く駆けつけた。一瞬で三人を倒し、残る破落戸たふろこたちもじきに拘束。電光石火はなはの早業わざでことを収束させたものの、彼は感謝を告げる間もなく立ち去ってしまう。

それきりヘンドリックさまと会う機会はなかったけれど。

——私は彼のことが忘れられなかった。

ヘンドリックさまが貧民街出身の平民と恋に落ちた話は有名で、私の耳にも当然その話は届いていた。けれど、それくらいで私の想いは変わらない。

だから、バームガウラス夫妻がヘンドリックさまの結婚相手を探していると聞いて、喜んで受けた。

彼に愛されなくても、子を産む道具の扱いだとしても構わない。あの方の妻になりた。側にいられるだけで幸せになれると思った。

だって、知らなかったから。

愛する人に愛されない苦痛を、人ではなく道具として扱われる意味を、そしてヘンドリックさまの狂気にも似たアリーさんという女性への執着を。

たとえ私にそのつもりがなくても、アリーさんを押しのけて正妻として嫁ぐことがヘンドリックさまの目にどう映るかなんて、この時の私は考えもしなかった。

「お前を愛するつもりはない。初夜だからとお前を抱くこともない」

結婚したその日、私はヘンドリックさまから『お前』と呼ばれる存在に成り果てた。

冷たい眼差し、不機嫌そうに寄せた眉、固く引き結ばれた口元。彼は全身で私がか不快

だと告げる。

「お前は子を産むための道具として嫁いだのだ。孕みやすい日を医者に算出させた後、その夜だけ子種を注ぎに来る」

それだけ言うとはンドリックさまは出ていき、私はひとり、初夜の床に残されたのだった。

翌日には医者に診察され、子どもができやすい日を知らされる。そうして、ヘンドリックさまは前夜の宣言通り、その算出日になるまで私の前に現れることはなかった。

……仕方ないわ。

この時の私は、まだヘンドリックさまの心を思い遣る余裕があった。

アリーさん愛するヘンドリックさまを愛したのは私で、それでもいいと了承の上で嫁いだのも私。

たとえヘンドリックさまが普段滞在するのが平民街に用意した彼女がいる家だとしても、式からずつと夫の姿を見ることが叶わなくても、正妻として彼の役に立てるならそれで十分だなんて。

すぐに愚かな夢だと思ひ知るとも知らず、ただ無邪気に彼のことを想っていた。

医者が算出した日のひとつ目が近づくにつれ、私の中で本当の初夜を迎える緊張と期待が高まっていく。片想いだとしても私からすれば恋する相手との行為、やつと願いが叶うと心は歓喜に震える。

だが、夢の終わりは呆気なかった。

約一ヶ月ぶりに現れたヘンドリックさまは嫌悪の表情を露わに、ベッドの端っこで所在なく座っていた私をいきなり押し倒す。愛の囁きどころか挨拶すらなく、夜着もそのまま裾だけを捲り上げて、私の太ももを露わにした。

驚きで声が出ない私の目の前で、ヘンドリックさまはトラウザーズの前部分だけを寛げ、雄を取り出したのだ。

「ヘンド、リックさ」

「静かにしろ」

愛撫も口づけもない。それどころか、まだ名前すら一度も呼ばれていない。ただ鋭い視線だけを向けられ、思わず私の体がぶると震える。

これが初夜？ そう思うのに、ヘンドリックさまは気にする様子もない。彼は黙って私の下穿きをずり下ろすと、両足を掴んで乱暴に広げる。

まさかこのまま……？

掴む手の力の強さに思わず顔が歪み、頭から血の気が引く。行為そのものは、もちろん初めてだが無知ではない。貴族令嬢として、閨の教育はちゃんと受けている。

だからこそ分かる、今から夫がしようとしていることは。

「ヘンドリック、さま。あの」

「黙っている。すぐに終わる」

懇願のように零れた言葉は、すぐにあっさりと遮られる。

ヘンドリックさまはそのまま、処女の固く秘された箇所を解すことなく、その猛々しい昂りを無情にも突き立てる。

「……っ！」

それまで誰も触れたことのない、きつく閉じられていた秘所。太く硬い昂りを押しつけられても、すんなりと入るはずはない。

身を引き裂くような痛み。あまりの苦痛に私の目から涙が零れ、ついに叫び声が出る。

それでもヘンドリックさまは、構うことなく雄をねじ込もうと腰を動かす。無表情のまま容赦なく昂りを奥へと進め、腰を打ちつけた。

そうして、ことは半刻もかからずに終わる。

「孕んでいなければ、またひと月後だ」

そんな言葉だけを残し、ヘンドリックさまは部屋を出た。

血が滲むシートの上に横たわったまま、私は呆然と天井を見上げる。無理矢理に開かれた秘所は、体を動かそうとするだけでひどく痛む。

『俺は生涯をかけて、アリーただひとり愛する。政略のために娶る妻に情を移すことはない。俺にとって妻とは子を産むための道具、その扱いを覚悟で嫁ぐがいい』

今になって、やっと私はその言葉の意味を知ったのだった。

バームガウラス公爵家の後継を産み、ヘンドリックさまに喜んでもらえればそれで良い。あの方を支えることができれば、それだけで幸せだから……なんて。

私は、そんな言葉に酔っていただけなのね。

膨らみ始めたお腹を見つめ、過去の私を自嘲する。

六回にわたる子作り作業の後、私は妊娠した。診察でその事実を知った時、これでようやくあの苦行から解放されると心から安堵したことに、我ながら笑ってしまった。

心から慕う男性であるヘンドリックさまとの閨は、もはや拷問と同じだった。彼の凍

てつく眼差まなざしして睨にらまれながら、体を引き裂かれるような痛みを耐える。十分足らずで終わる行為の翌日は、最低でも半日は痛みで体が動かせない。

そんな時間は肉体的にも精神的にも疲弊するもので、行為を予定した日が近づくだけで、私は食事もろくに取れなくなるほどだった。

「あんなに嫁ぐ日待ち焦がれていたのが嘘みたい。……でも、ようやく」
小さな咳きと共に、お腹をそっと撫でる。

この国は、男女共に相続の権利が認められている。だからどちらが生まれても、バームガウラス家の後継問題は解消するはずだ。

知らず、お腹をさする手に力がこもる。

無事に子どもが生まれたら、ヘンドリックさまの態度は変わるだろうか。彼が公爵家の主あるしとしての責任を果たすことに貢献できたら、愛はなくても、せめて私を妻として認めてくれるだろうか。

そんな希望に縋りかけ、あまただわ、と自嘲する。

分かっている、きつとそんな日はこない。

ヘンドリックさまの恋人への執着は有名で、私の父は愛娘の行く末をひどく心配し、無理に縁を結ばなくていいと言った。

それでも嫁ぐと言ったのは他でもない私。なんて滑稽で世間知らずの愚かな娘だったことか。愛されないことの意味を知らず、幸せになれると理由もなく信じ込んで。

「……本当、馬鹿みたい、ね」

もうとつくに気付いているのに、それでもまだ報われない恋心を弔えずにいるなんて、本当に私は愚おろか者に違いない。

産みの苦しみは想像以上に壮絶で、三日三晩続く陣痛に意識が何度も遠のきかける。

長引くお産に母子共に命が危ないと医師から言われ、駆けつけた義両親や義弟は相当慌あわてたらしいが、当事者の片割れであるヘンドリックさまは、その時まで屋敷に来てもないかった。

陣痛が始まってすぐにヘンドリックさまに使いを出したが、彼が到着したのはそれから半日経った夕刻の頃。しかし、生まれる気配がないと言って、彼の両親や弟が引き止めたにもかかわらず、来て一時間足らずで帰ってしまったそうだ。

妻ひと筋の愛妻家で有名な前公爵の義父——シャルマン・バームガウラスさまは、貴族社会において愛人の存在は珍しくないことは理解していたが、出産に際してなお愛人を優先させるヘンドリックさまに大いに失望したらしい。私たちの結婚を機に義父と共に

に領地に引っ込んでいた義母——ルイスさまも、実際に彼の行動を目の当たりにして落胆する。

これについては、ヘンドリックさまに関して何も報告しなかった私にも非はあるのかもしれない。

けれど、貴族令嬢として厳しく躰けられた私には、家の内情や心情を他者に打ち明けることなどできなかった。その行動がより私を追いつめることになるとしても、無言を貫く以外の選択肢はなかったのだ。

やがて、長く続いた陣痛の末に、私は男の子を産み落とす。小さなベッドですやすやと眠る赤子を眺めていると、出産の疲れからか、強烈な眠気に襲われる。

朦朧とする意識の中、生まれたばかりの赤子を視界の端に映しながら、正妻としての責務を果たせた喜びとふわふわとした幸福感に促され、らしくもなく思ったままを呟く。

「無事に生まれて嬉しいわ。……あの方は、私を褒めてくださるかしら」

くしゃくしゃの顔、上げる産声は小さいのに意外にも逞しい。夫にそっくりの黒色の髪に赤い眼で、顔立ちも夫に似ていると言われ、ああや遂げたと、誇らしくなる。

けれどヘンドリックさまは現れず、ベッド脇にいるのは彼の両親と弟だけ。もちろん彼らは後継の誕生を喜んでくれているものの、父親不在の現状に不安を抱いているのは

明らかだ。

それでも子どもが生まれたことで何かが変わる、あの人だって自分によく似たこの子を見たらさっと変わってくれるだろう、と、そう思っていたのだ。

翌朝、目を覚ますと、待ちわびた夫が赤子の傍らに立っていた。

待望の後継者、そう思っていたのは私だけだったのだろうか。そんな不安に駆られるくらいヘンドリックさまは無表情のまま赤子を見つめていた。抱こうともせず、手を伸ばすことすらしない。

「男だそうだな」

「はい」

私は僅かな期待を込めて頷きを返す。

「名付けは、父上に頼むつもりだ。貴族の血を引く跡取りを望んだのは両親だからな」

「……そうですか」

願っていたものとは違う夫との会話に、少し落胆した。

「あの、ヘンドリックさ……」

「これでようやく安心できるな」

それでも勇気を出して会話を続けようとした時、ヘンドリックさまが安堵あんぶの声を漏らす。

役に立てたと口元が綻ぶ。けれど、後に続く言葉で一瞬の歓喜は打ち砕かれた。

「これで、もう無理してお前を抱かずに済む」

ひゅつと喉が鳴る。

「……え？」

今、この人はなんて言ったの？

「もう月に一度、ここを訪れる必要もない……本当に良かった」

淡々と告げられる残酷な言葉に、私はついに理解する。私の努力も苦労も、闇の拷問ねぐらのような苦痛に耐えたことも全て、この人にとって何の意味もなかったのだ、と。

「未来のバームガウラス公爵となる子だ、しっかりと育てるように。騎士団で訓練が受けられる年齢になった時に、またここに来る」

くらくらくと目眩めまいがする。きつと私の顔は青ざめているだろう。

出産を終えたばかりの妻に労りの言葉ひとつもないまま、ヘンドリックさまは踵を返す。

静まり返る部屋の中、ひとり残された私は、目の前ですやすやと眠る我が子を見下ろ

した。

「……ああ、疲、れた……」

堰せきを切ったようにぼろぼろと涙が零こぼれ落ちる。

生まれてきた時、愛しいと、大切な我が子だと、確かにそう思ったのに。どうしてなの、もうそんな風に思えない。

零こぼれ落ちる涙がシーツを濡らす。私の側に涙を拭ってくれる人はいない。

きつと、あの書類にサインをして彼と婚約を結んだ日から、私の恋心にはひびが入っていたのだ。

壊れかけていたものが砕け散るのは簡単で、むしろ、ひび割れたものを大事に持ち続けるほうが大変だった。気を遣って、神経をすり減らして、そうして頑張った拳句、結局元には戻らない。

けれど、この恋心は砕けた後も私を解放してくれなかった。手放すのが遅すぎたのだろう。恋心だけでなく、私の心そのものも踏みじられ、歪ゆがんでしまった後では。

なのに、まだ私はそれに気付かない振りをしている。未だ止まらぬ涙に、不安ばかりが募っていった。

生まれた子は、お義父さまにより「ランスロット」と名付けられた。ランスロット——それは、この国の有名な童話の主人公である英雄の名前だ。お義父さまは照れくさそうに由来を話してくれたのに、私はヘンドリックさまが名付けを断ったことが悲しくて、あまり喜ぶことができなかった。

そうして、出産の翌日に顔を見せたとき、ヘンドリックさまは義務を果たしたとばかりに、一切屋敷に戻らなくなったのだった。

その行動に、彼の両親はさらに失望を膨らませる。義両親は私に改めて謝罪し、ランスロットの育児環境を整えるため、不在の息子に代わってできる限り援助すると申し出てくれた。

それに謝意を示しつつも、私は何も望まず、そのまま領地へと帰ってもらうことにした。

誰かに頼るなんて公爵夫人として恥ずかしいことで、正妻ならば愛人の存在を寛大な心で許さなければいけない。

それから私は乳母を募集し、マーガレットという名前の女性を選出し、子どもの世話を彼女に任せた。そして私自身は、不在の夫に代わって当主としての執務をこなし始める。ランスロットが三歳になると同時に、家庭教師をつけ、緻密な教育プログラムを組

み、厳格に授業に当たらせた。

『未来のバームガウラス公爵となる子だ、しっかりと育てるように』
夫にかけられた最後の言葉が、呪縛のように意識の中に沈み込む。

「……分かっておりますわ、ヘンドリックさま」

今や強迫観念に名を変えた親としての責務しか、私には継るものがない。

ランスロットのスケジュールは、日を追うごとに厳しく、分刻みになっていく。子どもらしく遊ぶ時間など不要と考え、彼の自由時間は全て削らせた。食事の時間もマナーチェックの場と化し、緊張の中でランスロットは料理を口に運ぶ。

ランスロットが六歳の時、たまりかねたマーガレットが、地獄のような彼の教育スケジュールを少しだけでも緩和できないかと願い出た。

……ランスロットの教育を誰にも邪魔させる訳にはいかない。

そう思った私は、すぐさまマーガレットに暇を出した。

その日を境に、ランスロットの教育はより一層厳しいものになっていく。母子で顔を合わせる時間など必要ない。ランスロットはお腹を痛めて産んだ息子というよりも、ヘンドリックさまから養育を命じられたバームガウラス公爵家の後継者だった。

そんな日々の中でも、夫の弟であるキンバリーさまは月に一度、バームガウラス邸を

訪れてくれた。彼はランスロットを肩車して連れ回すのが好きらしく、よく肩に乗せては庭園を歩き回っていると報告を受けている。

とても和やかな光景らしいが、生憎と私にそれを眺める暇はない。何度か偶然、執務室の窓から見たことはあったけれど。

ランスロットは利発な子どもだ。賢く、大人しく、従順で、無口。

屋敷に父の姿がない理由も、母である私と滅多に顔を合わせない理由も、他者から説明されずとも理解しているように見える。聞き分けがよく、過密な教育スケジュールにも黙々と従う。

ランスロットが無垢で従順な子どもでいる限り、私の心はまだ辛うじて平静を保つことができていた。

けれど、子どもはいつまでも子どものままではいられない。時と共に成長するもので、ランスロットもまた然り。子どもから少年になり、いつか男性であると証明される。

そして、ある夏の朝、唐突にその日はやつてきた。ランスロットが精通し、それを偶然に私が知ったのだ。

……駄目よ、そんなことは許せないわ。

『しっかりと育てるように』

ヘンドリックさまの言葉が頭の中で木霊し、血の気が引く。結果、私は鞭を手に取った。

「色欲に負けてはなりません。ランスロットはバームガウラス公爵家の後継者。常に清廉かつ潔白でなければなりません」

そんな、私の口から吐き出された呪いの言葉は、ランスロットを更なる地獄へと突き落とす。



バームガウラス公爵家当主ヘンドリックの弟である私——キンバリーは、言いようのない焦燥感に駆られて本邸を訪れていた。これまで月に一度、本邸を訪れては甥のランスロットと交流してきたが、ここ最近の甥の様子に違和感を覚えたからだ。

ランスは兄上とラシエルの絆を繋ぐ最後の希望だったように思う。

だが、子が生まれても兄上は変わらず、むしろ全く屋敷に戻らなくなった。

年を追うごとにますます兄上に似ていくランスの存在意義は、ラシエルの中では完璧に育て上げるべき後継者として変換されたいらしい。その比重が日を追うごとに大きく

なつていったのは、外部の人間である私が見ても明らかだった。

会えた時はなるべく外に連れ出して遊ぶようにしたもの、叔父にすぎない男の、それも月に一度の訪問くらいで何かが変わるはずもない。無力感とは裏腹に、甥を親身に世話していた乳母はいつの間にか解雇され、ランスのスケジュールはより過重に、より過酷なものになっていく。

そうして十歳を過ぎた頃、何かが大きく変わってしまった。

ランスは元々が大人しく表情も乏しい子だったが、今は能面のように凍りついた表情で、何の感情も見せない。しかも腕や足のあちこちに見えるのは大小の痣。

屋敷内の者たちを探りを入れてみても、使用人たちから満足のいく答えは得られない。使用人の誰かによる暴力も疑ったが、彼らはこれまでランスに親身に仕えており、最近になって使用人が入れ替わった事実もない。

考えすぎかとも思ったが、やがてランスの面差しにまで変化が現れた。

子ども特有のふくよかな頬が落ち、顔周りが少しずつ痩せてきたのだ。子どもから大人へと成長する段階で顔のラインが細くなるのはよくあることだが、まだ早すぎる気がした。ランスは来月で十二歳、まだ子どもらしい体型でいるほうがよほど自然だ。

しばらくすると、顔だけではなく腕や足までもが細くなつてきていることに気付く。

そんな甥を見て心配が募り、義姉ラシエルに面会を願う。

本来なら兄上に話を通すべきなのだろう、だが父親としての責務を放棄し、騎士団で会つても息子の名前すら口にしない彼に話しても意味はないと判断した。

……いや、違う。私には予感めいたものがあつたのかもしれない。あの痣が使用人の誰かによる暴力の痕でないのなら、それはきつと、と。

「義姉上。ランスの腕や足に痣があつたのだが、偶然の怪我にしては多すぎるような……」

「嫌ですわ、キンバリーさま。あれは嫉です。あの子を汚れた色欲から遠ざけるために、必要な教育を施しているのです。ヘンドリックさまの言葉に従うべく、精一杯ランスロットを育てなければいけませんもの」

その時、ラシエルが何を考えていたかは想像しかできない。ただ、その答えを聞くに、彼女は最善の努力を払ったつもりでいたと分かる。

「……」

私は何を言えたいのだろうか。そもそもその資格があるのだろうか。

それは嫉ではない、君は間違っている、母の愛情はそんなものではないはず、そう言えばこの悲劇は終わるのだろうか。……本当にそれだけで？

結局、私は彼女に返す言葉を見つけれないまま、ただ頭を下げて退室した。伯爵令嬢だった頃から頻繁に孤児院に慰問しに行くほど愛情深かった彼女が、あれほど眩しい笑顔だった美しい人が、自分の息子を虐待してしまうまでに追いつめられている。海を切り取ったような青色の眼差しは、ひどく空虚で何も映していない。

そんな風には彼女を追いつめた張本人は、私の実の兄なのだ。ランスを守らねばならない、けれど、助けが必要なのはラシエルもまた同じ。

私に何ができるだろうかと考えながらエントランスまで行くと、そこで甥が待っていた。

「ランス……すまなかったな」

気付くのが遅れたことへの謝罪をランスに伝え、急いで馬に跨る。

「後で迎えに来る」

そう言って、急ぐ心のままに馬の腹を蹴った。

そうだ、騎士寮を出て家を借り、ランスをしばらく預かる。ラシエルにも休む時間が必要だ。宿を取って数日しのいで、その間に家を探せばいい。

努力すればきっと良い方向へ変われると、まだその時の私は信じていたのだ。

「すまなかったな、レーベン。帰るところを呼び止めてしまつて。急いでいたから助かったよ」

運良く道中で目当ての部下と遭遇した私は、隣で馬を並走させる部下のレーベンに謝意を告げる。

レーベンは鷹揚に首を横に振って、からからと笑う。

「構いませんよ。お袋も客が増えて喜ぶでしょうし。でも、副隊長は騎士団寮に住んでいるのに、どうしてまた突然うちが経営する宿なんかにか？ しかも長く借りたいですね」

「……団員ではない者を寮に住ませる訳にはいかないからな。だから、私もお前のところの宿を借りて、しばらくそこで一緒に住むつもりだ」

「え？」

レーベンは口をぽかんと開けたまま、まじまじと私を見つめる。

「マジか……副隊長にも、とうとう春が」

「は？」

意味が分からず困惑する私に、レーベンはまた目を丸くする。

「……違うんですか？ てっきり女ができたのかと」

「馬鹿なことを言うな。そんな人はいない……それに、私は一生独身でいるつもりだ」
その台詞を吐く時、胸がちくりと痛んだことを見て見ぬ振りをする。

そう、それが正解だ。あの人には既に夫がいる。どれだけ蔑ろにされようとも、十三年近く顔を合わせていなくても、心がぼろぼろに壊れてもなお、愛を捨てられないほどに強く想う人が、彼女にはいるのだ。

「じゃあ副隊長、女じゃないなら誰なんです？」

「……私の甥だ」

「……？ あっ、まさか、あの、団長の……」

そこまで言いかけて、レーベンは口を噤む。

いくらレーベンがのんびりした性格でも、私の兄であり、私たちふたりの上司でもある人物の醜聞は耳に入っているらしい。

貧民街出身の女への愛に狂った公爵家当主。誰もが羨む美しい令嬢を妻としておきながら、新婚早々に愛人宅に入り浸った無神経な夫。

当主としての仕事を一切放棄し、十年以上前に生まれた実の息子の顔を一度しか見たことがない。息子の名前すら知らないのでは、と囁かれるほどの無関心ぶり。

兄上の圧倒的な強さを称える人たちが一定数いるものの、彼ら以外の下した評価は概

ねそんなところだ。

……前はそんな人ではなかったのに。

確かに、以前から人付き合いが苦手なところはあった。口下手だし、お世辞も社交辞令もろくに口にしない、というかできない。融通が利かなくて、思い込みが激しくて、不器用。

しかし、いつだって物事に真摯に全力で取り組む人だった。両親や自分が笑いかけると、それに合わせてぎこちなく口角を上げる兄上が好きだった。騎士団長としての仕事も当主の執務がどれだけ忙しくても、手を抜くことなくきつちりとこなす。兄上の名声に憧れる数多くの令嬢たちからの秋波には目もくれない真面目な人だった。

そんな兄の印象が、ある日ガラリと変わったのは、貧民街での捕物の際、巻き込まれた通りすがりの少女——アリーに運命を感じた日だった。

理詰めの話が好き、何事にも理由を求める兄が、急に話を通じない人に変わってしまった。身分違いの恋に溺れているだけという見方もあったけれど、以前の兄に戻る気配はない。

それでも、いつか目が覚める日がくるのではと期待して待ってしまう。いつものように黙り込んで少しの間考えて、「なるほど、分かった。そういうことか」と言って、ま

た昔の兄に戻ってくれるのではないかと。

そんな期待に反して、日を追うごとに恋人への執着が強くなっていく様子に、父上も母上も頭を抱えていた。王国一の英雄と称えられる兄上の代わりはいないのだ。

「副隊長、あの馬は……?」

思考の淵に沈んでいると、レーベンの声で我に返った。バームガウラス家の門をくぐり抜けると、見覚えのある馬がエントランス近くを闊歩している。

「あれは兄上の馬だ。なぜ……?」

いかにも急いで乗り捨てた風のその光景に、胸がざわつく。

「……団長もここにいらっしやることがあるんですね」

レーベンの声が耳に届き、そんなはずはないと首を横に振る。そんなことはこれまでに一度もなかったのだ。

視線をさらに奥に向ければ、エントランス内がひどく慌ただしい。

……もし、兄上が今のランスを見たら……?」

「……っ、副隊長?」

レーベンの声に応える時間も惜しく、私は無言で馬から下りると、そのままエントランスに駆ける。

——嫌な予感しかしなかった。



叔父上のキンバリーを見送った僕——ランスロットは、そのままエントランスで誰もいない門の外をぼんやりと眺め続けた。もう少し話をしたかったのに、今日の叔父上はどこか慌てた様子で、いつもより早めに帰ってしまったことが残念だ。

叔父上はことあるごとに僕と母上を繋ごうとして、『ランス、君のお母さまは、子ども好きで優しい人なのだよ』や『君が生まれてくるのを、それはそれは楽しみにしていたんだ』など優しい言葉を口にする。

母上が僕のことを好きなのは知らないのに、叔父上の話を聞いていると、そうかもしれないと思ってしまう自分がいる。そして、少しだけ心が温かくなるのだ。

僕は優しい叔父上が大好きだ。もの静かで、誠実で、努力家で、少し気弱なところがある叔父上。そんな叔父上は、口癖のように「兄上はすごい人」と僕に言う。その兄上は、もちろん僕の父上のことだ。

叔父上を信用しているけれど、正直その言葉だけは間違っていると思う。

確かに父上はこの国の騎士団長だし、十代の頃には既に功績を残していたと聞いているから、強いのは嘘ではないだろう。

でも、その「すごい人」である父上は、来月十二歳になる息子の僕に、まだ一度しか会いに来たことがない。なぜなら、愛人宅で暮らしているからだ。

……でも、別にいいんだ。もう、諦めたから。

門の外をぼんやりと眺めながら、僕は無意識に右の腰の辺りに手を伸ばす。

腰に提げているのは、半年前に叔父上がくれた子ども用の剣。護身用として常に腰に差しておくの良いと言われ、それ以来肌身離さず帯剣している。

プレゼントされたのと同時に、そろそろ剣術を学ぶ頃だと言って、叔父上は初歩的な訓練も始めてくれた。

剣に触れ、叔父上の温もりを思い出した僕の肩の力は自然と抜ける。

その時、通りから蹄の音が聞こえてきた。

「……叔父上？」

そう思い目線を上げると、現れたのは叔父上とは違う髪色の男。……僕と同じ黒色で赤い眼。

「お前がランスロットか」

髪や眼だけでなく顔立ちまでそっくりで、初めて見る顔なのに目の前の人物が誰なのかがすぐに分かる。

「そろそろ十二になるだろう。騎士団の訓練に参加させようと思い、寄ったのだが……」

およそ十二年ぶりに会う息子に挨拶のひとつもなく要件を切り出した父上は、言葉の途中で口を噤む。

全身に降り注ぐ不躡な視線に居心地の悪さを感じ、僕は微かに身じろいだ。

「なぜそんなに痩せている？ 食事はどうしているのだ？ それに、その痣はどうした」

別に答えは求めていないらしく、父上は問いをひとり呟く。

「あの魔女め。子育てひとつまともにもできないのか。大切な跡取りに乱暴を働くとは」
勢い良く馬から下りると、そのままエントランスに入っていく。その時、十二年ぶりに帰還した当主に気付いたのは、偶然そこに居合わせたメイドひとりだけ。
父上はそのメイドに声をかけることなく、ずかずかと中へ進む。慌てたメイドは執事

のもとに報告しに走るが、父上はそれも待たず階段に足をかける。

乱暴に階段を駆け上がる父上の姿を、僕は呆然と見ていた。やがて、父上がどこに行くつもりなのかに気付き、慌ててその背を追う。

果たして、二階の廊下の先、母上の部屋の扉が開いていた。
 「役立たずがっ！ お前がいてはあの子のためにならんっ！」
 激昂した父上らしき声が、僕のいるところにまで響いてきた。

「……っ」

いつか誰かが口にするかもしれない、と予想していた台詞。（せりふ）

けれど、それが父上から出たことが許せなかった。湧き上がる怒りのままに廊下を駆け抜け、母上の部屋に飛び込む。

「母上……っ！」

見れば、父上が腰に提げていた剣を抜き、母上に振りかざしているではないか。

僕の声に驚いたのか、父上の気は一瞬逸れる。勢いでそのまま振り下ろされた剣は母上の肩に沈んだ。怒りに燃えた僕は思わず叫ぶ。

「役立たずなどと言うな……っ！ 母上を壊した貴様が……貴様が、言うなっ！」

なぜそれをお前が言うのだ、よりによってお前が。お前だけは、それを言っではないけない。なのはどうして。

「壊す……？ 馬鹿な、会ってもいないのに壊せるはずがない。そもそも、壊さないために俺は離れていたのに」

僕は腰に提げていた剣を抜き、父上の背に思い切り突き立てる。

獣のような呻き声（うめ）を上げる男の表情は見えない。でも斬りつけられた母上の顔はよく見えた。

驚きで見開いた海の色の瞳は、僕を真っすぐに映している。

そう、母上は驚いていたのだ。自分が斬られたことにはなく、息子が自分を助けようとしたことに。

けれど所詮は子ども用の剣で、子どもの力。思い切り刺しても、さほど深い傷にもならない。

小さな剣を背に刺したまま父上は僕に向き直り、母上の血がついた剣を振り上げた。

「この……愚か者がっ！」（おろ）

すさまじい勢いで振り下ろされる剣に、僕は目を瞑ることもできず、その場に立ち尽くす。

刹那、視界に人の影が映り、僕を覆う。そして血しぶきが飛び散った。

しかし、それは僕の血ではなかった。

僕の痩せ細った体をしっかりと抱え込んだその人は。

「は、は……うえ……」

僕の目に、信じられない光景が映る。何度も何度も夢に見た、自分を抱きしめる母上の姿。けれど、美しい母上の背中からは血がどくどくと流れている。

「……私は……間違えたのね……大切なのは、あの人ではなくて……ランスロット、あなただった……の、に……」

母上の声はたどたどしく、力はない。

嫌だ、嘘だと叫びたいのに、からからの喉は何も音を出せない。

「ランスロット、ごめん……なさ……」

そう言つて、母上が最後に見せてくれたのは、僕が初めて見る柔らかな微笑みで。

「……嘘だ。……嘘だ、嘘だ！」

僕を庇い、背中を切り裂かれて倒れる母上を、ただ必死に抱き止めた。



私——キンバリーが慌あわてて階段を駆け上がり、ラシエルの部屋に飛び込むと、まず目に入ったのは、血しぶきを浴び、悲愴な表情を浮かべたランスの顔。目は見開かれ、

その腕はしっかりと母を支えようとラシエルの体に回されている。

そして、ランスが抱きしめる彼女の背中と肩には剣で斬られた痕があった。

まだ幼さの残る少年の体では、小柄とはいえ成人女性の体を支えることなど到底できるはずもなく、ラシエルとランスは、ずるずるとへたり込むようにして絨毯じゅうたんの上に腰を下ろす。

鮮明な赤が、彼女の背からどくどくと流れ出て、回されたランスの腕もまた、鮮血に染まっていく。こんな時でさえ美しい彼女に、私の胸はどうしようもない痛みを覚えた。

「ごめん……なさ……」

ラシエルは最期に息子に謝罪の言葉を告げ、艶やかに微笑む。対照的に、ランスの眼は悲愴に染まり、水晶のように透き通った雫がぼたぼたと深紅の眼こほから零れ落ちる。

捨てたはずの母性を最期の瞬間に取り戻したラシエルの眼まがたが、ゆっくりと閉じられていくのが見えた。

私は思わず一歩、前に踏み出す。

……ずっと好きだった、あなたを守りたかった。

最初に見かけたのはいつだったろうか。

孤児院の慰問、市場での炊き出し、教会のチャリティ、会場の警護や街中の巡回中。騎士団に所属する身として、人が集まる場に駆り出されるのはよくあることで、そうして出向いた先で、福祉関連のイベントがある時には必ずと言って良いほど見かける少女がいた。

最初にその少女に目が留まったのは、その場にいる人たちの中で、彼女が最も輝いていたからだ。

簡素なワンピース姿で走り回る彼女を初めて見た瞬間に、なんて綺麗な子だろうと思った。彼女が見せる微笑みは、誰よりも優しく、美しかった。

気がつけば、私の目はいつも彼女を探していた。名前も知らない、家名ももちろん分からない。けれど、見つけ出そうとは思わなかった。遠目に彼女の姿を見るだけで満足だったのだ。

そんな時に孤児院の事件が起きた。運悪く巻き込まれたのは慰問で孤児院を訪れていたあの少女で、彼女を救い出したのは私ではなく兄上だった。剣を振るうことなく素手で七人もの破落戸ならすものを拘束した兄上に、当たり前のように彼女は恋をした。後に兄の妻となったその人に、ただの親族にすぎない私は何も望んではいけないと、想いを心の中心に深くしまい込んだのだ。

彼女が幸せに笑えればいい、たとえその幸せを与えるのが私ではなくても。

だけど、こんな風に壊れてしまうのなら、こんな形で逝ってしまうことになると思うだけだ。

ああ、奪ってしまえば良かったのだ。兄のように貴族としての義務も責務も放り出し、ただラシエルとランスと三人でどこかへ逃げてしまえば良かった。たとえ男として見てもらえなくても、私に何の想いも向けられなくても、彼女が生きていてくれれば、生きてさえいてくれるのなら、それで良かったのに。

「……っ、あ、うああああああああっ！」

自分から発せられたとは信じられないほどの、獣にも似た叫びが喉から溢れる。

それとほぼ時を同じくして、廊下から複数の足音が聞こえてきた。惨憺さいたんたる現状を目の当たりにして、レーベンや使用人たちは声にならない悲鳴を上げる。

気付けば腰の剣に手をかけていた私は、ぐつと堪えて手を剣から離し大きく息を吐いた。

「レーベン、応援を呼んできてくれ」

レーベンはすぐに走ったが、馬で騎士団本部、もしくは王都内の各所にある詰所のことかに向かったとして半刻はかかるだろう。

私は扉の近くで真つ青な顔をして立ちつくす執事に、公爵家の私兵を呼ぶよう指示を出した。

本心を言うなら、今すぐラシエルとランスのもとに駆け寄り、子どものようにみっともなく大声で泣き喚きたかった。

だが、状況はそれを許さない。今この場で動けるのは、その権限があるのは私だけ。ラシエルとランスの横を通り過ぎ、膝をついたまま呆然と涙を零す兄上に近づく。兄の涙を初めて見たことに気付く余裕など私にはない。

「……兄上。バームガウラス公爵夫人殺害、および公爵子息殺害未遂の罪であなたを捕縛します」

私の声はみっともなく震え、気付けば涙までぼたぼたと溢れ落ちていた。エントランスに私兵が到着したのだろうか。複数の声が遠くから聞こえるのがどこか他人事のようにだ。

虚ろな表情で涙を流し続ける兄上は、抵抗する素振りもなくあっさりと拘束され、連行されていく。

こうして私の兄、ヘンドリック・バームガウラスは、自身の妻殺害、および息子の殺害未遂という大罪のもとに投獄される——はずだった。

しかし、牢へと連行する途中、兄上は騎士たちの隙を突いて姿を消した。

そして間もなく、逃走を謀った場所からほんの少し離れた時計塔の近くの草むらで兄上の遺体が発見されたのだ。頭から血を流し、うつ伏せに倒れていた状況から見、逃げたその足で時計塔の天辺に登り、そこから飛び降りたと考えられた。

その二日後には、兄上が長年大切に囲っていた運命の恋の相手——アリーの遺体が川で発見される。裏社会の仕業という意見も出たが、自殺か他殺かは判断がつかなかった。

自領の別邸にて長子の起こした事件について知った父上はその場で自害、前公爵夫人である母上はショックで気を失い、そのまま床に臥すようになる。

その後、バームガウラス家は降爵されて伯爵位となり、当主に僅か十二歳のランスが立つことになった。私は醜聞まみれのバームガウラス家を背負わされたランスの後見として、奔走することになる。

あの日、バームガウラス公爵家の大小様々な歪みが、一気に結実したかのようにして起きた凄惨な事件。貴族たちはもちろん、民にも衝撃を与えたこの事件は、瞬く間に王国全土へと広まり、長く時を経てもなお人々の記憶に残り続けた。

歴史あるバームガウラス公爵家の威信が根底から崩れた日だった。



センサーシヨナルな事件を起こした父の亡き後、僕——ランスロットは、十二歳で伯爵位に降爵されたバームガウラス家の当主となった。

事件の時に母と祖父を亡くし、それから三年後に今度は祖母を亡くした。さらにはその二年半後、今から半年ほど前に、僕をずつと支えてくれた叔父上が病で亡くなった。

そして今、バームガウラス家の直系は十八歳になった僕ひとりだけだ。

その時から、いや多分それよりも前からだろう、僕には生きる意味が分からなくなっていた。

この先、誰かが僕の隣にいる未来など想像できない。誰かを愛せる自信もない。

僕もいずれ父のようになるのではないか、そんな恐れから、たとえ政略的なものであっても結婚する気が起きないのだ。そもそも「呪われたバームガウラス家」に、嫁ぎたい者など誰もいない。

——ああ、時が巻き戻せるなら。あの言い伝えが本当なら、どうかこの願いを叶えてほしい。どんなことをしてでも——

叔父が亡くなる前に口にした願いは僕とて同じ。時の魔術を操る灰色の魔術師——単なるお伽噺、騙されて終わらるうと思いつつ、使える伝手を全て使って得た情報を頼りに、爵位も屋敷も売り、一縷の望みをかけてここに来た。

これで駄目なら野垂れ死んでしまえばいいと、もはや自暴自棄の心境で。

「……なるほど、それがお前の人生という訳かい。なかなか難儀だな、誰も幸せにならなかった物語だ」

灰色のローブで全身を覆う謎の男にそう言われ、僕は苦い笑みを浮かべる。

誰も幸せにならなかった物語とは言い得て妙、なにせ話をした僕自身そう思っているのだ。改めて他人からそう評されても笑うしかないだろう。

「……これで、願いごとをしに来た理由に納得したか？」

彼の目の前に金貨の入った袋をこれでもかと積み上げれば、ローブの男はにやりと笑った。

「時を遡るには、関係者の体の一部を使うことが必要なんだが、何かあるか？」

僕は首元に提げた袋の中から一房の髪を取り出す。今は輝きを失ったそれは母の、元は美しく艶やかな金髪だった。

初め、ローブの男はこちらに何の関心も示さず、ただ淡々と話を進めていた。だが、

僕が二十五年分の時間を巻き戻したいと話す途端に態度が変わる。そしてなぜか僕の年齢まで聞いてきた。

先月、十八になったばかりだと答えると、「お前が存在しなくなるのは構わないのか」と問われた。

「存在しなくて構わないどころか、むしろ僕などいないほうがいいんだ。だから、早く二十五年前に戻って、両親の結婚をなかったことにしてくれ」

そんな僕の答えに、男は身の上話を聞かせてみると言い出した。

——色々な大衆小説から悲劇の要素ばかりを集めて、ぐちゃぐちゃに混ぜ込んだような出来の悪い物語。男のそんな言葉に同意しかないが、残念なのはそれが実際に僕の身の上で起きたということ。

それまでじっと聞き役に徹していた男は、手をひらひらと振って笑う。

「別に、疑ってたとかそういうんじゃないんだ。ただ頼まれた年数が年数だったものでな。四、五年ならともかく、二十五年なんて」

「……」

ローブの男はずいっと顔を近づける。

「だって、頼んできた本人が生まれるよりもずっと前に時間を巻き戻してほしいって言

われたら、一体何があったんだって興味も出るだろう?」

「では……願いは聞いてもらえるのだな?」

「いや。残念ながらこれじゃ足りない。これっぽっちの額では二十五年も戻せないな」

期待を込めて問うた僕に、灰色のローブの男は残酷な事実を突きつける。

「な……っ、一年につき金貨百枚と聞いている。だから僕は……っ」

思わず声を荒らげれば、男は感情のない声で言葉を継ぐ。

「悪いが、別の客と契約したルールがあつてね。ある一日にだけ、どれくらい金額がかつてるんだ。その一日を超えるだけでも、少なくとも七百枚分の金貨が必要になる。

だからお前の場合、その日を含め、当初の希望通り二十五年の時間を巻き戻すのなら、合計で金貨三千二百枚必要になるな」

「三千二百……そんな……屋敷も爵位も売った……もうこれ以上は……」

僕は体中の力が抜け、目の前が真っ暗になる。時を巻き戻せるなどでたらめかもしれないと疑いつつも、これが最後の希望だったのだ。

「そうだなあ、今から十九年までなら、一年につき百枚でやれる。それより前となると、まずは七百枚払ってからだ」

「……っ、駄目だ、十九年では足りない、それでは意味がないんだ！ だったらせつかく、時間を巻き戻しても、母上は不幸なままではないか……っ！」

僕は激しく首を左右に振って叫ぶ。

「……十九年前だと母上は結婚している。それでは間に合わない、それでは……母上を救えない」

男は、ローブの上からがしがしと頭をかくと、少しの思案の後に口を開く。

「詫びに今から三日分だけ時間を戻してやろう。それで爵位などを売る前に戻って、元の生活を続けよう」

その提案に、僕はまた首を左右に振る。

「……それはいい。僕はもう、生きたいとは思っていないから」

僕が生まれたせいで、僕を産まねばならなかったせいで、僕がいたせいで、母上が不幸になりバームガウラス公爵家は凋落した。祖父母も、叔父上も亡くなった。叔父上は最後までそうじゃないと言ってくれたけれど、少なくとも僕にはそうとしか思えなかった。

……ならば、僕が生まれなければいい。僕が生まれる前に戻って、母上は父上ではない誰かと幸せになればいい。

だからこそ、十九年では意味がないのだ。もっとなんと前、母上が父上に恋心を抱く前に時間を戻さなくては……

「……そうかな？」

ローブの男の眩きが耳に届く。彼は目を瞑り、自分自身のこめかみをトントンと人差し指で軽く叩く。

そうしてしばらくの間、何かを考える様子を見せた後に男は目を開ける。それから、やおら指を折って何かを数え始めた。

「……ふむ、なるほど。全く意味がないこともなさそうだ。十九年と六ヶ月。戻せるところギリギリまで時間を戻してやろう」

「……え？」

「全員が幸せに円満解決とはいかない。それでも、少なくとも全員、今の人生よりはずつとましな人生が送れるだろうよ」

僕はしばし黙り込み、その言葉の意味を考える。

「……全員、この人生よりは？」

「ああ、そうだ。お前も、お前の母も、お前の父でさえも、今のこの最悪の人生よりはずつとマシになるだろう。視てきたからそれは間違いない」